

# 青森大学薬学部 同窓会誌

創刊号

2022年6月20日発行  
発行：青森大学薬学部  
〒030-0943  
青森県青森市幸畑2-3-1  
青森大学事務局  
TEL:017(738)2001



## C O T E N T S

1. 同窓会会長挨拶
2. 学部長挨拶
3. 退任の挨拶
4. 令和3年度学位記授与式
5. 令和4年度入学式
6. 白衣授与式举行了！
7. 新任の挨拶

特集

「コロナ禍での薬剤師奮闘記」

弘前保健所 大川 晋生（5期生）

---

# 同窓会会長挨拶

青森大学 薬学部同窓会 会長 千葉 佳友

---

## 「地域包括ケアシステム」の一翼を担うために、同窓生のネットワーク強化を

薬学部同窓の皆様には、ますます清栄のこととお喜び申し上げます。また、平素より、同窓会活動に対して深いご理解と多大なご協力を賜り、感謝申し上げます。

世界中で猛威を奮っている新型コロナウイルス感染症が、日本でもようやく落ち着きを見せ始めた矢先、新たな変異ウイルス「オミクロン株」の出現し、再び懸念や混乱が広がっています。この同窓会誌を皆様をご覧になるころには、終息に向かっていることを心よりお祈り申し上げます。

さて、同窓会活動につきましては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、総会や交流会、研修会が2年連続で中止となる事態に至りました。しかし、同窓会の大きな目的の一つに、県内外で活躍されている青森大学薬学部の同窓生とネットワークを繋ぐということがあります。新型コロナウイルス感染症の影響が薬剤師業界にも及んでいる、このような時だからこそ、同窓会のつながりがより重要になってくると考えております。

ご承知のとおり、近年、薬価改定や調剤報酬の改定などで「調剤薬局」の経営環境は悪化しております。加えて、今回の新型コロナウイルス感染症の影響で、受診控えや薬の長期処方拡大し、結果として、昨年1-8月の「調剤薬局」の倒産が過去最多を記録するなど、「調剤薬局」業界は試練の時を迎えております。

こうした厳しい状況下で、生き残りをかけ、患者から選ばれる「調剤薬局」となる

ために、「調剤薬局」とそこに勤務する薬剤師には、医療機関の近隣という立地に依存した処方箋調剤だけでなく、より地域との関係を強化し、他の医療提供施設と連携しながら、地域における薬剤等の適正な使用の推進及び効率的な提供を行うことが求められています。

例えば、がん等の薬物療法では、多くの治療が外来通院で行える時代となったことで、特殊な調剤への対応や退院時の支援など、地域の実情に応じて、「調剤薬局」の薬剤師が、「病院」の薬剤師等と連携することが必要となります。

青森大学薬学部は、青森県内唯一の薬科大学として、少ないながらも毎年一定数の薬剤師を輩出しており、同窓生は、青森県内だけでなく多くの都道府県の「調剤薬局」や「病院」で、薬剤師として活躍しております。そのため、同窓会は、こうした「調剤薬局」と「病院」の薬剤師間のネットワークを強化する絶好の場となります。

そのため、同窓生の絆を再結束させ、同窓生たちが、それぞれの地域で「地域包括ケアシステム」の一翼を担えるよう、令和4年度は、「With コロナ」に対応した形式で、何とか総会や交流会、研修会を開催したいと考えています。

最後に、私は、同窓会長として、8年ほど務めさせていただきましたが、振り返ってみますと、同窓生のネットワークを構築するという点では、力不足であったと痛感しております。次の総会では、会長を含めた同窓会役員の改選が行われる予定です。次期会長による新しい体制には、私ができなかった同窓会の組織力の強化にご尽力いただけることを期待します。

# 学部長挨拶

薬学部長 水野 憲一



## 学部長就任のご挨拶と近況報告 「学生募集、学部教育のために、 同窓生のお力添えが必要です。」

薬学部同窓の皆様におかれましては、お元氣でご活躍のこととお喜び申し上げます。

2021年度より学部長に就任いたしました水野憲一と申します。青森大学薬学部同窓会誌をお届けするにあたりご挨拶申し上げます。

まずは自己紹介をさせていただきます。私は2014年度より青森大学薬学部教授として就任いたしました。当時の熊崎隆学部長、徳光幸子薬学次長は、大学時代の恩師でもあり、さらに第5代青森大学学長であった栗原堅三先生は大学での指導教官でもありました。青森の土地ははじめてであったものの、とても親しみやすい、なぜかなつかしい環境でした。熊崎先生が退官後、上田條二教授、三浦裕也教授が学部長として就任されました。三浦学部長のもと、学科長として4年間お世話になっていましたが、三浦先生の後任として学部長を引き継がさせていただきました。微力ではありますが、これまでお世話になってきた青森大学薬学部にも少しでも恩返しができればと思っております。同窓会の皆様におかれましては、何卒ご指導・ご鞭撻のほどをよろしく申し上げます。

2021年度も学位記授与式が挙行され、32名の卒業生を輩出することができました。しかしながら、学生募集に関しては学生数の減少、また新型コロナウイルス感染症の影響による薬学部志望者の減少により、入学者数の確保も苦戦しております。薬剤師の魅力が中学生や高校生に伝えるのは、われわれ薬学部だけの力では限界があり、そして、一線で活躍している薬剤師である同窓生の皆様の力が必要となってきます。

私個人におきましては、青森大学薬学部に来る前は、薬学部と関連のない理学系、医学系の大学での仕事であったため、出身大学の薬学部同窓会とのつながりは希薄でした。しかしながら薬学部に関わる中で、様々な薬学関係の会議などで、いまさらながら出身大学のつながりはより近いものとなり、いまでもよい薬学部での情報源であります。

そのような同窓生の交流の場として、同窓会活動はなくてはならないものと考えておりますが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、同窓会総会や交流会、研修会が開催できない中、なんとか同窓会の輪を繋ごうと、千葉佳友同窓会会長を中心にご尽力いただき、同窓会誌を創刊することとなりました。

薬学部の近況ですが、鈴木克彦教授、金光兵衛教授、益見厚子教授が退任されることとなり、ご挨拶をいただきました。また一方、有機化学系の後任として吉村祥准教授、分析化学系の後任として稲垣稲垣真輔教授が新たに加わることとなりました。さらに、薬学部における大きな変革として、植木章晴先生と福井雅之先生が教授昇任とともに、それぞれ学科長、薬学教育センター長として就任いただき、まさに新生薬学部として本年度より稼働しています。お二人が今までとは異なった風を薬学部に吹き込んでくれると、今後の活躍に大きな期待を寄せています。

学生募集において厳しい状況ではありますが、薬学部教員一丸となって、より一層薬剤師育成に向けた教育に邁進していく所存です。同窓会の皆様におかれましても、今後とも何卒青森大学薬学部へのご支援を賜りたく、改めてお願い申し上げます。

最後になりましたが、同窓会のみなさまのご健康とご活躍を祈念致しまして、ご挨拶とさせていただきます。

# 退任の挨拶

## 分析化学研究室 金光兵衛



青森大学には、薬学部設立時からとなりますので、2004年より丸18年となり、一つの地域に住んでいる年数としては、一番長い場所となりました。

私学薬学部の教員は、青森大学で二度目となります。一度目は、北大修士修了後、講座のボス（長澤滋治名誉教授）からの推薦もあり、北海道医療大学で6年間助手として勤めていました。当時は学生実習しか担当していなかったので、研究室以外の学生とはあまり関わりはありませんでした。しかし、青森に来て、その当時、学生だった薬剤師の先生から声をかけていただけることもあり、私のことを覚えていたことに驚いています。ちなみに当時は、今みたいに「怖い」というイメージはありませんでした（と思います）。

医療大退職後、ちょっと寄り道をして、青森大学薬学部の教員となりました。ここでの18年間、本校の先生や学生、薬局や病院の薬剤師の先生を含め多くの方々と知り合い、また多くのことを学ばせていただきました。自分の知らなかった領域からの意見を伺ったりして、赴任当時に比べ考え方も変わってきました（勉強方針は今も変わらず鬼モードですが・・・）。でも、そのことをここで活かせることができなかったのが、後悔の念としてあります。新天地でも色々な方と協力しながら、薬学生の教育に頑張っていると思います。

最後に、卒業生の皆さん、色々な方面で活躍しているとの報告を聞くたびに嬉しく思います。今後も益々のご活躍をお祈り申し上げます。また、いつかどこかでお会いできますことを願っています。いろいろとお世話になりました。ありがとうございました。

## 有機化学研究室 鈴木克彦



このたび、7年間お世話になった青森大学を去ることになりました。薬学部は教えなければならないことがキッチリと決まっておリ、振り返ると教科書をこんなに読んで勉強したのは初めてかもしれません。そういえば、私は小さい頃から両親に「勉強しなさい」と言われたこともありませんでした。むしろ、「勉強で飯が食えるのか？」と言われていています。社会で必要とされるのは学校の勉強ができる人ではなくて仕事のできる人とか人柄が良い人、ということなのでしょう。しかし、やりたいことをやるには勉強が必要ということもだんだんわかってきて、要するに「やれと言われてやるものではない」と思うようになりました。言われなければ出来ない奴はいらない、とまでは考えませんが、つまらないロボットのようになって欲しくない人には命令口調で言わないことにしています。「した方がいいですよ」「していただけますか？」「やんないの？」という感じですが、「一緒にやりましょう」というセリフが一番好きです。教員が言うべきことではないかもしれませんが、教科書に書いてあることは大して面白くありません。本当はその先に未知との遭遇が期待できる面白いところがある、ということ卒業研究とかで伝えたかったのですが、国家試験に向けて忙しそうなお学生さんたちにとっては余計なお世話だったかもしれません。とはいえ、興味あるかは別としても新しいことに取り組み人に説明するプロセスは今後の役に立つに違いないと思うことにしています。

私には色々やりたいことがあって、心機一転、4月から別の学校で教えることにしました。やはり試験勉強ばかりでは息が詰まりそうなので、わずかな時間であってもクリエイティブなことをしたいと思っています。

雪の季節には完敗でしたが、青森いいところでした。みなさん、仲間に入れてくれてありがとう。同窓会で会いましょう。そのときまでお元気で。

# 退任の挨拶

## 分子薬理学教室 益見厚子



私は2015年東京から青森に単身赴任でやってきました。最初はこれまで国の研究所でやってきた研究は続けられないことは承知で講義のことしか頭になかったのですが、卒業研究生の配属に関して教室を訪問して来られる学生に戸惑いましたが、学生はまじめに実験をやってくれました。女子学生の何人かは成績に関係なくしっかりしたデータをとっていました。とにかく国家試験も心配だろうけれどももしっかり真面目に実験をやってくれていた研究室の学生諸君には大変感心しています。

6年制の薬学生は4年制のときと変わらず薬学研究にも貢献していく必要があって欲しいと思っています。そして嬉しかったことは私の研究室で卒業研究優秀賞（最優秀賞も）をとってくれた学生がおられたことです。

大学の行事に関しては卒業試験委員長、卒業研究委員長を一年ずつ担当しました。その後は全学の図書委員と学生、教員発表委員を担当したので自分の教育研究に関する時間はあった方だと思います。最近学部学生がほとんど質問に来てくれなかったので少し寂しい気もしました。

薬理学1は再試験対象者も多く、再履修者も毎年数名以上おられます。薬剤師国家試験では薬理は正答率が高いけれども学問としては難しいのだということは念頭に置いておいてほしいです。

一方、病態薬物治療学との融合、実務科目との複合問題などに関わっているうちに今の薬理学はあのかの基礎薬理学ではない、もっと病態に関わることはもちろん実務系、医療系に関する深い知識を持ち合わせながら薬理学教育していかななくてはならないと感じ始めています。それで病態、薬理や実務との複合問題の奥深さを理解して薬剤師になっていかれる学生たちに対して私は「薬剤師もいいな」、と思うこの頃です。

## 令和3年度学位記授与式

近年にない、豪雪もやっと雪解けが始まった、3月11日金曜日、正徳館にて学位授与式が挙

行されました。薬学部34名が社会人として羽ばたいていきました。

その後、別室へ集合し水野学部長から、激励のメッセージを送り、国家試験発表までのワクワクドキドキの中の学位記授与式は滞りなくお開きとなりました。悔やまれるのは、新型コロナウイルス感染拡大につき、今回も懇親会開催が中止になってしまいました。

来年度こそ、教員と学生の最後の語らいの場が復活することを願うばかりです。



最後のお勤め鈴木学科長  
長い間ありがとうございました。



学長賞は水木君に授与されました



恒例  
水野学部長お別れのご挨拶もホールの一隅でした。



感染防止対策も完璧！

# 令和4年度入学式

桜のつばみも膨らみ始めた4月2日土曜日、好天にも恵まれ入学式が挙行されました。

新型コロナウイルス感染症対策としての、式典は簡素化されましたが、本年度からむつキャンパスが開講され、本校、東京、むつの3キャンパス体制もスタートし、各キャンパスはビデオ中継で結ばれ、祝辞ではむつ市長の宮下宗一郎様からむつキャンパスから祝辞をいただきました。

また、新入生代表もむつキャンパスの小向瑠菜さんが選ばれ、学生生活への期待と意気込みを力強く宣誓しました。



金井学長式辞



緊張の面持ちの植木新学科長



薬学部新入生24名



全学部251名



祝辞：むつ市長宮下宗一郎様

## 白衣授与式挙行されました！



金井学長式辞



水野学部長訓示



学生代表立花萌々香さんの誓いの言葉



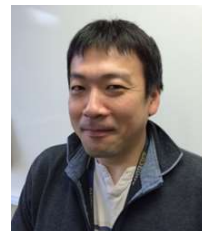
大きな成果を得てください!!

5月10日、本学記念ホールにて、第2回白衣授与式を開催し、実務実習へ赴く、5年生29名に真新しい白衣を授与し、医療現場で多くの体験を積み、成果を上げることができるよう、エールを送りました。本来は2月に開催予定でしたが、昨今の状況を鑑み、1期の学生はすでに実習中ですが、Zoomでの参加により、実習生全員一体感を伴い心新たに実習に取り組むことを期待しております。

---

## 新任の挨拶

有機合成化学研究室 准教授 吉村 祥



---

2022年4月に青森大学薬学部の准教授として着任いたしました吉村祥（よしむらあきら）と申します。2010年3月に徳島大学大学薬学科教育学部博士後期課程を修了後、アメリカ及びロシアの大学でポスドクや職員として12年間、研究や教育に携わってきました。専門は有機化学で、特にハロゲン元素やヘテロ化合物の特長を活かした研究を展開しております。本学部での教育・研究に貢献できるよう尽力致しますので、皆様にはご指導・ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

---

## 新任の挨拶

生体分析化学研究室 准教授 稲垣 真輔



---

生体分析化学研究室に着任いたしました稲垣真輔と申します。これまでは、主に液体クロマトグラフィーによる生体機能性分子の分析法開発に関連した研究や、有機分析用の認証標準物質の開発などに取り組んで参りました。本学では、これまでに習得した技術等を最大限に活かしつつ、微力ではありますが、研究および教育の両面で少しでも貢献できたらと考えております。どうかご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 「コロナ禍での薬剤師奮闘記」



大川 晋生（5期）

おおかわ・くにお  
青森大学薬学部を卒業後、  
青森県職員に採用され、  
現在は弘前保健所に勤務。

## —— 普段の仕事について教えてください。

普段は、食品衛生監視員として、飲食店や食品製造業の許認可、監視指導、食品に関する苦情対応、食中毒調査、食品表示に関する相談対応などを行っています。

ただ、弘前保健所管内でも、新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生してからは、コロナ対応がメインの業務になっています。

## —— たしか一昨年（2020年）の10月に、弘前保健所管内の飲食店で、大規模クラスターが発生していましたね。

そうですね。あの時から、保健所職員全員がコロナ対応に追われて、毎日帰宅は夜中になっていましたし、土日関係なく出勤していたので、気がついたら2週間連続で勤務していたなんてことになっていましたね。

当時、関東地方の保健所職員が、コロナ対応のため、月の時間外勤務が100時間を超えており、職員が疲弊してしまっているというニュースが流れていましたが、まさに自分たちもそれを体験しているという状況でした。

## —— コロナ対応ということですが、具体的にはどのようなことをしていたのですか。

私が担当していたのは、PCR検査の対象となった方々への検査案内や結果の連絡、医療機関への患者の受診調整や入院調整、移動手段のない方々の搬送業務などです。

特に、大変だったのが、患者や検査対象者への電話連絡でした。当時は、連日のように1日100件以上の検査が行われており、その結果は、翌日に数回に分けて判明するのですが、最終結果が夜の8時を過ぎるケースも多かったです。そのため、そこから結果連絡の電話をしたり、陽性が判明した方については、行動調査や接触者の確認も行って、その後、入院する医療機関の調整を行う訳ですので、これらの作業が全て終わる頃には、時計の針が夜11時を軽く過ぎていました。

## —— 当時は、保健所の対応がいろいろ批判されていましたよね。

そこを聞いてきますか（苦笑）。

保健所の電話は複数回線あったのですが、保健所への厳しいご意見の電話が殺到したことで、電話回線がパンクして、なかなか電話が繋がらない状況となってしまう、そのことがさらに多くの方々の不満を招く事態となっていましたね。

ただ、皆さんから貴重なご意見をいただいたことで、その後に数回発生した大規模クラスターにも何とか対応して、無事に切り抜けることができたと思っています。

## —— う～ん、優等生的回答ですね（笑）。記念すべき同窓会誌創刊号の特集企画ですので、もっと大川さんの心の声まで拾いたいですね。

いやいや、本当の話ですよ（笑）。いただいた意見というのは、きちんと所内で共有した上で、改善できるところはしっかりと改善していきました。

ただ、せっかくですので補足しますと、当時は患者を受け入れる病院でも、何かと手探り状態だったところもあり、病院の方からも保健所にきつめのご意見等が数多く寄せられていました。

ですので、こちらとしては、一般の方々

だけでなく病院のスタッフ達からも、まるで挟み撃ちにされているような状況になって、朝から晩まで、電話する度にお叱りを受けるという状況が続いていました。あの時はさすがに精神的に辛いと感じる時がありましたよ（苦笑）。

次から次へと電話をかけていかないといけない中で、怒ってらっしゃる方のお話というの、やはり最後まで聞いて、その方に寄り添った対応をしないといけないと思うと、なかなか仕事が進まず、当時はかなりストレスを感じていたんだと思います。家に帰って寝ている時も、夢の中で必死に電話をかけていました（笑）。

— そんな状況で、休みなく、しかも毎日夜遅くまで仕事をし、よく倒れずに終息までやり遂げることができましたね。

もうダメだって思った時に、他の保健所や県庁などから、色々な方が支援しに来てくれて、それが本当に助かりました。

特に、大学病院などからDMATが応援で来てくれた時からは状況が一変して、医療機関との調整や、患者の入院調整もものすごくスムーズになって、急に光が見えた感じがしました。



写真1. ミーティングに参加するDMAT

— DMATが来て、一番変わったところは、どんなところだったのでしょうか。

主に災害時の医療救護で行われるトリアージが導入されたことです。

あの時は、毎日のように10名以上の陽性者が出ており、弘前保健所管内の医療機関では病床が逼迫している状況でした。

そんな中、DMATでは、陽性となった方々に、まず医療機関で医師の診察を受けてもらい、肺炎の有無などから患者の重症度を判定するというのを始めました。

その結果、より症状の重い患者を優先的に入院させ、軽症や無症状の患者には、県で用意した宿泊施設に入所してもらうという対応が可能になりました。

また、陽性が判明してから入院までの流れがしっかりと決まったことで、保健所と医療機関との連携が取れるようになり、医療機関での混乱も少なくなりました。

何よりも、陽性となられた方々に対し、保健所から最初に今後の流れを説明できるようになったことで、患者の不安も減り、入院や宿泊療養施設への案内もスムーズに行えるようになったことが大きかったですね。この辺りから、電話しても怒られるということがものすごく少なくなったので、我々の精神的な負担も軽減しました（笑）。

— なるほど（笑）。そうしたDMATの支援もあって、なんとか飲食店クラスターも終息した訳ですが、12月下旬になると、今度は県内初の学校クラスターが発生してしまいましたよね。あの時の状況について、教えてください。

学校クラスターとしては、県内初の事案だったんですね。今ここで言われるまで知りませんでした（笑）。

クリスマスが終わった頃だったと思いますが、学校関係者から陽性者が出たことを受けて、その学校の接触者を検査したところ、多くの陽性者が出て、クラスターになったものです。

当時は、なんとか年を越さずに終息して欲しいという気持ちで、必死に対応していた記憶があります。ただ、結局は年末年始

を1日も休むことなく、出勤していました（苦笑）。

この学校クラスターですが、前回の飲食店クラスターの時とは違った苦労がありました。

まず問題となったのが、患者を搬送するための車です。陽性となる患者の多くが学校の生徒たちであったため、彼らは運転免許を持っておらず、トリアージのために病院を受診する際や宿泊施設に入所する際は、保健所で搬送する必要があります。

ところが、当時、保健所には感染症用の車両が1台しかなく、それでは、次々と陽性が判明する患者の搬送にはとても足りませんでした。

そこで、保健所にある別の車の運転席と後部座席との間に、自分たちでビニールシートを貼って、その車を患者搬送用の車両として使用することにしましたが、これが搬送中にビニールシートが剥がれたりで大変でした。患者搬送中は、防護服とN95マスクを着用していたため、感染することはありませんでしたが、真冬のため、窓を開けることもできず、密閉され車内において、患者と自分を隔てる唯一のビニールシートが剥がれた訳ですから、その時は内心パニック状態になりました（笑）。保健所に戻ってから、早急に感染症用の車両を確保するよう、上司に本気でお願いしていたことを覚えています。

次に問題となったのが、宿泊施設で療養している方への薬の処方でした。

陽性判明後に行うトリアージの結果、肺炎がなく、無症状や軽症の方というのは、宿泊施設への入所となるのですが、中には、療養中に頭痛や咳などの症状が出現したり、その症状がひどくなる方も少なくありませんでした。

今回のクラスターでは、患者が学生で若いということもあって、飲食店クラスターの時とは異なり、患者の多くが入院ではなく、宿泊施設での療養となりました。

その結果、療養中の患者から、鎮咳薬や頭痛薬の処方についての要望が複数寄せられ、その対応に苦慮することとなりました。

宿泊施設には、療養している患者の健康観察を行う看護師はおりますが、医師はおらず、当然のことながら、施設内に薬局はありません。

当時は、医療機関や薬剤師会とも相談した結果、私たちが調整した医療機関を患者に受診してもらい、そこで薬を貰うという対応になりました。

ただ、これだと宿泊施設から医療機関まで患者を搬送する必要があり、先ほどの車不足の件もあって、現在は、医療機関で電話診療を行い、患者のかかりつけ薬局が薬の配達を行う方向で、医師会と薬剤師会が話し合いを行っているところです。



写真2. 搬送中に剥がれたビニールシート

—— 確かに、かかりつけ薬局で薬を配達してもらえると助かりますね。既に、患者に配達をしている薬局はあるのですか。

あります。少し前に、患者に薬の配達をしてくれないか相談したところ、最初は「う～ん」という感じでしたが、最後は協力してくれた薬局がありました。あの時は、非常に助かりましたね。

こうした薬局はまだまだは少ないですが、国では、「薬局における薬剤交付支援事業」という事業を実施しており、電話や情報通信機器による服薬指導等を行った患者に対して、薬局が薬剤を配送した場合、国

が費用を支援してくれるものとなっています。

ただ、こうした制度を活用するためには、薬局と医療機関が連携する必要があるため、薬局では、日頃からそうした体制を整備しておくことが重要だと考えています。

— 次に、プライベートなことを聞いてしまうのですが、保健所がコロナ対応で忙しい時期に、自身にも感染疑いが生じて、自宅待機を余技なくされたことがあったと聞いています。この時の、職場の皆さんの反応はどんなものだったのですか。

思いっきりプライベートな話ですよ（苦笑）。この話題は、校正の段階で、削除されることを願います（笑）。

職場の反応ですが、割と優しい言葉をかけてくれましたね（笑）。

当時の状況ですが、ある日突然、身近な人が陽性者の濃厚接触者になってしまって、かなり動揺したことを覚えています。すぐに上司に相談して、相手の検査結果が出るまでは自宅待機となりました。念のため、家族にはホテルで暮らしてもらって、私は1人で家で待機していたので、非常に心細かったですね。

ただ、非常にいい経験にもなったと思っています。自分も自宅待機となって、結果判明を待つ間のあの不安や、何も悪いことはしていないはずなのに、ものすごく罪悪感を感じる体験をして、普段、コロナ対応をしていて、なぜ一般の方々が感情的になったり、保健所に相談の電話をかけるのかが、よくわかった気がしました。保健所では、県民に寄り添った対応を心がけるようにとよく言われていたのですが、本当に相手に寄り添った対応というのは、同じ立場になったことがある人間でないと難しいものなのかもしれないですね。

— なんか思いがけず、深イ話になってしまいましたね（笑）。今日、色々とお

話を伺って、大川さんの奮闘ぶりを知って、この企画のタイトルを決めました。「コロナ禍での薬剤師奮闘記」というタイトルにしたいと思います。

大層なタイトルですが、私の話なんかにそのようなタイトルで大丈夫なんでしょうか。

— 大丈夫です！これでいきます！！  
最後に、これを読んでもらえる先生や同窓生に何かありましたら、お願いします。

メッセージというのは、ちょっと恥ずかしくて言えませんが、大学時代にお世話になった徳光先生には、ぜひこの記事を読んでもらえたらと思っています。

学生の時には、あまり成績がよくなって、色々心配をおかけしたので、無事に薬剤師となって、今はこうして保健所職員として働いているということを伝えたいですね。

— 徳光先生でしたら、同窓会には必ず出席して下さっているのので、ぜひ大川さんも同窓会に顔を出してください。

はい。日程があえば、ぜひ出席したいと思います～す。

— 本日は、どうもありがとうございました。

interviewer

藤野 香織（ふじの かおり）

旧姓：根橋。青森大学薬学部卒（3期）。大学卒業後、青森県職員に採用され、現在は青森県立中央病院に勤務。

【編集後記】

本学に薬学部が誕生して18年。223名の薬剤師を輩出し、全国で活躍されていることでしょう。

その歴史を踏まえ、卒業生のみなさまとの架け橋として同窓会が機能しているのですが、昨今の状況では総会を開催することも躊躇せざるを得ませんでした。しかし、卒業生のみなさまへの大学の今を発信するために会報を創刊するに至りました。今後は、定期的な発刊を予定しますので、掲載希望する記事がありましたら、ぜひ本学への情報提供をお待ちしております。

（老生）